# 早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書（Web 公開用）

| | |
|---|---|
| 申請者（ふりがな） | （　田中穂乃香　） |
| 所属・資格（※学生の場合は課程・学年を記載） | 早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程 1 年 |
| 発表年月<br>または事業開催年月 | 2021 年　8 月 |
| 発表学会・大会<br>または事業名・開催場所 | 日本教育心理学会第 63 回総会 |
| 発表者（※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること） | 田中穂乃香・山本菜々子・桂川泰典 |
| 発表題目（※学会発表の場合のみ記載） | 一般他者に対する愛着スタイルとメンタライジング能力の関連 |

発表の概要と成果（抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。）

【問題と目的】メンタライジングは養育者との愛着関係を基盤に発達するものであるが，メンタライジング不全は抑うつや不安などの精神症状に影響するだけでなく，情動理解の困難や共感の欠如を引き起こす（Fonagy et al.,2007）ことから，対人関係に問題を生じさせる可能性が高い。しかし，先行研究で用いられている愛着は親や恋人に対するものであり，メンタライジングは他者との関係を想定しているにも関わらず一般的な他者に対する愛着を用いて検討しているものは少ない。そこで本研究では，一般他者に対する愛着スタイルにおける低下したメンタライジング領域の関連を検討することを目的とする。

【方法】調査対象者：首都圏に在学する大学生 190 名（男子 65 名，女子 125 名，平均年齢 20.85 歳，$SD$ = 1.63）を対象とした。調査材料：(a)一般他者版成人愛着スタイル尺度（中尾・加藤，2004）（以下，ECR-GO）(b)日本語版メンタライゼーション尺度（The Mentalization Scale: Dimitrijević, Hanak, Dimitrijević, & Marjanović, 2018 松葉他 訳 2019）（以下，J-MentS）

【結果と考察】ECR-GO 尺度により全調査対象者を安定型（$N$ = 47），とらわれ型（$N$ = 42），恐れ型（$N$ = 51），拒絶型（$N$ = 50）の 4 類型に分類し，各愛着スタイルのメンタライジング能力の差異を検討した。独立変数を愛着スタイル 4 類型，従属変数を J-MentS 尺度得点として 1 要因分散分析を行った結果，有意差が示され（ $F$ (3, 186) = 11.60, $p$ < .01 ），多重比較を行ったところ，「恐れ型」は他の愛着スタイルと比較してメンタライジング能力が有意に低かった。また，従属変数を J-MentS の各下位尺度得点として 1 要因分散分析を行った結果，「他者に対するメンタライゼーション」（ $F$ (3, 186) = 14.00, $p$ < .01），「自己に対するメンタライゼーション」において有意であり（ $F$ (3, 186) = 18.85, $p$ < .01），多重比較の結果，下位尺度別に見ても，「恐れ型」は自己・他者ともにメンタライゼーション得点が有意に低かった。これらの結果から，「恐れ型」は自己観・他者観ともにネガティブな愛着スタイルであるため，自己と他者の双方について考える力が求められるメンタライジング能力が全体として低いと考えられる。また，自己観がネガティブな愛着スタイルである「とらわれ型」は「自己に対するメンタライゼーション」得点が，「安定型」「拒絶型」と比較して有意に低かった。このことから，「とらわれ型」は他者の行動や気持ちを意識することに尽力するあまり，自己の行動の意味を考えたり感情について内省したりすることに意識を向けることが難しいと考えられる。さらに，各変数間

の相関関係を検討した結果,「見捨てられ不安」と「自己に対するメンタライゼーション」に（ $r$=.55, $p$ < .01 ),「親密性の回避」と「他者に対するメンタライゼーション」に（ $r$ = .43, $p$ < .01）中程度の相関が見られた。以上の結果から，見捨てられ不安は自己に対する，親密性の回避は他者に対するメンタライジング能力と対応していることが明らかとなった。

本研究から，愛着スタイルによって低下しているメンタライジングの側面を明らかにし，治療の前提として補うことにより，治療同盟の強化や治療の効率化につながる可能性が考えられる。今後はメンタライジング能力の向上を目指す介入方法の検討が必要である。

※無断転載禁止